実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所
『年報』第 5 号　2019 年 3 月　抜刷

「外から見た女子学寮」
――ヴァージニア・ウルフと女子高等教育――

志渡岡　理恵

「外から見た女子学寮」

――ヴァージニア・ウルフと女子高等教育――

志渡岡 理恵

1. はじめに

20世紀前半イギリスのモダニズムの代表的作家Virginia Woolfは、「家庭の天使を殺すことは、女性作家の仕事の一部でした」(“Professions for Women” 142) という言葉を遺したフェミニストでもあった。フェミニスト・ウルフの代表作は*A Room of One's Own* (1929) で、これは、1928年にケンブリッジ大学の女子学寮ニューナムとガートンで行った講演をまとめたものである。彼女は、この作品の中で、「女性が小説を書こうと思うなら、お金と自分だけの部屋を持たなければなりません」(3) という印象的な言葉を用い、19世紀末まで財産を所有する権利を法律で禁じられ、常に家族のために時間を使うことを要請されてきた女性たちが、自分自身の財産と時間・空間を所有する権利を持たなければ創造的活動を行うのは困難であるという見解を表明した。

ウルフがこの作品のもととなった講演を行ったとき、女子の高等教育は始まってからまだ1世紀も経っていなかった。当時、大学へ進学する女性の数は限られていた。同時代の多くの女性たちと同様、ウルフも家庭で教育され、学校教育を受けることはなかった。父親はケンブリッジ大学の教師で (後に信仰を失い退職)、兄弟は同大学で学んで学友たちとブルームズベリ・グループをつくった。ウルフも彼らとの議論を楽しんだが、彼女にとって大学は、身近でありながら「部外者」としてしか訪れることのできない場所だった。そんな彼女の目に、設立されて間もない女子学寮はどのように映ったのだろうか。そして、彼女はそこで学ぶ女子学生たちにどのような夢を託したのだろうか。

本稿は、『自分だけの部屋』と、その3年前に発表されたニューナムを舞台とした短編小説 “A Woman's College from Outside” (1926) においてウルフが表した女子高等教育への想いを、当時の女子教育の状況を踏まえながら捉え直し、女性にとっての高等教育の意義を再考するものである。

2. 「尻尾のない猫」――懐疑的な視線

『自分だけの部屋』の第1章でまずウルフは、「部外者」が大学に対して抱く疎外感と違和感を、架空のエピソードというかたちで分節化している。最初に語られるのは、大学の閉鎖性と女性に対する差別を象徴するエピソードである。オックスブリッジ（架空の大学）の女子学寮ファーナム（架空の女子学寮）での講演を依頼された「わたし」は、講演内容を考えながら学寮の芝生を横切ろうとしたとき、典礼係から「恐怖と憤慨が入り混じった表情」(5) で遮られる。そのとたんに「理性というより本能が」、「あの男性は典礼係で、わたしは女性。こちらは芝生で、向こうが小道。芝生は学寮の教員と学生のみ入ることができ、あちらの砂利道こそわたしの居場所」(5) と「わたし」に告げる。ここで「本能」と呼ばれているのは、「わたし」（＝女性）が内面化した女性差別のコードであると考えられる。「わたし」は、その内面化されたコードで典礼係の振る舞いの意味を理解したのである。

次に、図書館に入ろうとした「わたし」は、今度は「慇懃な銀髪の親切そうな紳士」に行く手を阻まれ、「ご婦人方はカレッジの教員の付き添いがある場合か、紹介状をお持ちの場合にしか入館が認められないのです」(6) と追い返される。「わたし」は、大学の女性に対する差別的な態度を見せつけられ、憤りをあらわにする。

> ひとりの女性に罵倒されても、有名図書館にとっては、それはどうでもいいことです。古式ゆかしく穏やかに、懐中に宝物をしっかりしまい込み、有名図書館は満足そうに眠っていました。わたしに関する限り、それは永遠に眠り続けるのでしょう。過去の残響など二度と呼び覚ますものか、入れてくださいなんて二度と頼むものかと、私は怒って階段を降りながら誓いました。(6)

この一節には、長きに亘り知へのアクセスを制限されてきた女性の怒りが表現されている。大学の所有地でのこれら2つのエピソードの背景には、女性が19世紀後半まで高等教育から排除され、財産所有権を法律で禁じられていたという歴史的事実がある。大学という高等教育機関は、それまでずっと男性の占有物だった。

しかし、19世紀後半のEmily Davisらによる女子教育改革により、女性にも高等教育への道が開かれ、女子学寮が設立された。さらに、第一次世界大戦後は、女性も参政権を獲得し、専門職をはじめとするさまざまな職業に就く女性が増えてきた。それに伴い、女性の意識は、19世紀末から20世紀初頭にかけて大きく変化した。

このような社会状況の変化により生じた意識の変化は、女性が物事を以前とは異なる視点から見ることを可能にした。「わたし」はそれを「尻尾のない猫」(9) にまつわるエピソードとして語る。堂々たる建物が建ち並ぶ男子学寮の昼食会に出席した「わたし」は、豪華な食事と惜しみなく供されるワインでもてなされ、「人生とは何と素晴らしいのだろう、

人生の報酬とは何と甘美なのだろう、この愚痴もあの不平もどうでもいい、友情とは、同好の士の集まりとは、なんと素敵なのだろう」(9) という大学を称える雰囲気に包まれる。しかし、ふと「尻尾のない猫」を目にしたことをきっかけに、「何かが欠けているようだ、何かが違うようだ」(9) と思い始める。

この「わたし」が覚えた違和感は、第一次世界大戦を経験することによって芽生えた感情、別の言い方をするならば、女性が懐疑的なまなざしで物事を見つめ直すことにより現れた世界に対する反応と考えられる。「わたし」は、前世代の詩人であるAlfred TennysonとChristina Rossettiの詩の一節（男女がそれぞれ相手に対するロマンティックな想いを詠ったもの）を思い出し、第一次世界大戦前の昼食会ではみんながこんなことを口ずさんでいたのかと考えると「可笑しくて噴き出して」(10) しまう。第一次世界大戦を経た「わたし」にとっては、テニスンやロセッティが紡ぐ世界は砕かれた幻想でしかない。

> 責められるべきは戦争ということにしましょうか？ 1914年8月、戦争が始まったとき、男女の顔はお互いの目にあまりに不器量に見えたので、ロマンスは殺されてしまったのでしょうか？ たしかに砲弾の光の中で我々の統治者たちの顔を見るのは（とくに教育などに幻想を抱いていた女性たちにとっては）衝撃でした。あまりにも醜く、彼らは見えました――ドイツもイギリスもフランスも――あまりにも愚かに。(12)

この一節で示されているのは、権力、お金、影響力を有する統治者（男性）たちは偉大だと教え込まれてきた女性たちが、第一次世界大戦という未曽有の大惨事の中で彼らの本性を目の当たりにし、それを疑うようになった、ということである。女性たちは以前とは異なる批判的なまなざしで現実を見つめるようになった。そして、「わたし」は、「しかし、なぜ『責められるべき』と言うのでしょうか？……幻想を破壊し、代わりに真実をもたらしてくれたのなら」(12) と、女性が批判的な態度で現実に向き合うようになったことを肯定的に捉えている。

ここで注意すべきは、「わたし」が、立派な教育を受けたはずの男性たちによって戦争が引き起こされたという事実に言及している点である。「教育などに幻想を抱いていた女性たち」という言葉には、男性の手でつくりあげられた教育システムに対する不信感が表れている。第2章で、「わたし」は、男性の受けてきた教育の欠陥について次のように述べている。

> 彼らの受けた教育は、ある意味でわたし自身のものと同じくらい失敗だったのです。それは、彼らの中に大きな欠陥を生みました。確かに彼らはお金と権力を手にしましたが、それと引き換えに、懐中にハゲタカを飼わなければなりませんでした。絶え間なく肝臓を食い破り、肺をついばむハゲタカを――それは所有したいという本能、獲

得したいという強烈な思いで、常に他人の土地やものが欲しくなります。辺境を切り拓いて国旗を立てます。軍艦や毒ガスを製造します。自分の命も我が子の命も差し出します。(30)

「わたし」は、男性による男性のための教育が男性の心に所有欲を植えつけ、それがコントロールできないほどにまで高じて戦争が引き起こされたと認識している。言い換えれば、それは、男性のつくりあげてきた教育システムは模範にはならないということである。「わたし」は、高等教育を受ける権利をようやく手にした女性たちが既存の教育システムをただ享受するだけではだめだと考えているのである。

3. お金の効用――剥がれたヴェール

それでは、高等教育の機会を手にした世代の女性たちが集う女子学寮ファーナムは、「わたし」の目にどのように映るのだろうか。「わたし」が夕食会に訪れた女子学寮ファーナムは、男子学寮とは対照的に、開放的で自由な、そして貧しい学寮として表象されている。「わたし」は庭へと足を踏み入れるが、「扉は開け放たれ、典礼係もいないよう」で、眼前に広がるファーナムの庭は「自然のまま、開放的で、長い草の間にはラッパスイセンとブルーベルが無造作に咲き乱れて」(13) いる。供された食事は粗末なもので、飲み物はワインではなく、「水差しが何度も回され」(14) る。しかし、粗末な食事しか提供されない環境の中でも、「廊下そして階段と、イングランドの若者たちは歌いながら闊歩して」(14) いき、ようやく高等教育を受ける機会を得た女子学生たちは、快活に学生生活を送っているように見える。

しかし、「わたし」は、ここで清貧を説かずに、女子学寮の資金の乏しさを問題視する。これこそが、『自分だけの部屋』がフェミニズムの聖典とされる理由のひとつでもある。「わたし」は、「よく食べていなければ、よく考えることも、よく愛することも、よく眠ることもできません」(14) と、人間の心と体と脳は全て繋がっていると指摘し、「わたしたちに財産も遺せないなんて、母親たちは何をしていたのでしょうか」(16) と問いかける。

もし彼女が事業を始めていたらどうだったでしょうか？ レーヨン業者になっていたり、株式市場で大物になっていたりしたらどうだったのでしょう？ もし彼女がファーナムに二、三十万ポンド遺していたら、今晩、わたしたちはのんびりくつろぎながら、考古学、植物学、人類学、物理学、原子の性質、数学、天文学、相対性理論、地理学までもを話題にできていたでしょう。シートン夫人とその母親とそのまた母親が、父親や祖父たち同様にお金をもうける術を学んで資産を遺してくれていたら、女性のための教員職や講座や賞や奨学金制度が創設され、わたしたちはここで二人きりで鳥肉を

食べワインを開けて、そこそこの夕食をいただいていたかもしれません。お給料のいい専門職に守られて、快適で栄誉ある生涯を楽しみにしていたかもしれません。あちこち探検していたかもしれませんし、執筆活動に励んでいたかもしれません。世界中の名所旧跡を訪ねていたかもしれません。パルテノン神殿の石段に座って瞑想するか、10時に出勤して4時半には楽々と帰宅して、ささやかな詩を書いていたかもしれません。(16-17)

数十年前まで女性はお金を稼ぐことも、財産を所有する権利もなかったことが、現在の若い世代の貧しさに繋がっていると指摘したうえで、「わたし」は、財産を所有することが精神にゆとりをもたらし、それが創作活動などを行う活力を生むと論じている。

この主張を例証するために、「わたし」は、固定収入を得たことで自らの意識がどのように変化したかを詳らかにしていく。ある日突然、伯母の遺産を相続することになった「わたし」は、それまで抱え込んでいた「恐れや苦々しい気持ちという毒」(29) が次第に消えていくのを感じた、と言う。

お釣りの小銭を財布にしまいながら、当時の苦々しい気持ちを思い出しながら、わたしは思いました――本当に、固定収入があるだけでこんなに気分が変わるなんて驚きだ。この世のどんな力もわたしから500ポンドを奪い取ることはできない。衣食住はこの先ずっとわたしのもの。だから、骨折りやきつい仕事ばかりでなく、嫌悪や苦々しい気持ちもなくなった。私は男性の誰も嫌う必要がない。誰もわたしを傷つけることはできないから。男性の誰もおだてる必要はない。誰からも何ももらわなくていいから――と。(29-30)

つまり、女性自身が安定した収入を得られれば、男性に経済的に頼る必要はなくなり、男性の顔色をうかがわずに生活していけるようになる。そうすると、女性は、男性に対して抱いていた恐怖心や嫌悪感から解放される、ということである。

さらに、そのような解放された精神状態で男性を見ると、それまで気づかなかった彼らの欠点が見えてきて、「わたし」は、やがて何のわだかまりもなく物事自体をみることができるようになったと語る。

そして、これらの欠点に気づくにつれ、恐れや苦々しい気持ちは、次第に憐れみや寛容な気持ちに変わっていきました。それから1、2年経つと、憐れみや寛大な気持ちもなくなり、すべてから解放されました。それは、物事をそれ自体として自由に考えられるということです。たとえば、わたしはあの建物が好きだろうか？ あの絵は美しいだろうか？ わたしの考えでは、あれは良い本だろうか、悪い本だろうか？ 本当

に、伯母の遺産のおかげで空一面を覆い尽くしていたヴェールが剝がれ、ミルトンがわたしに常に崇拝しなさいと薦めた大きくて威圧的な紳士の姿の代わりに、一面の青空が広がったのでした。(30)

お金の最大の効用は、「物事をそれ自体として自由に考えられる」ようにしてくれたことである。「わたし」は、作品の終わりに近い箇所で、「お金を稼いで自分だけの部屋をお持ちくださいと申し上げるとき、わたしはみなさんに現実を見据えて生きてくださいとお願いしています」(83) と述べている。「現実を見据える」とは、恐れや怒り、嫌悪といった感情に左右されることなく、物事を冷静に観察し、評価し、自分の意見を率直に表現することである。

「わたし」は、男性に経済的に従属させられたことにより女性が「物事をそれ自体として自由に考え」られなくなった、あるいは自分の意見を自由に言えなくなったと説明する。生きるために、「女性はこれまでずっと男性の姿を実物の２倍の大きさに映す素晴らしい魔法の力を持った鏡の役割を果たし」、男性は、「女性が真実を語り始めたら、鏡に映った姿が縮んでしまう」(28) ので、女性が経済的に自立できないように仕向けたのだ、と。だから女性はお金を稼ぐ必要があるというのが、「わたし」の主張である。ユーモアを交えながら、「わたし」は、「誰だって後頭部には自分には見えない１シリング大の禿げた部分」があり、「女性は、その１シリング大の禿げた部分を言葉で言い表して初めて、男性の真の全体像が描けるのです」(68) と女子学生たちに語りかける。そして、「自分が書きたいことを書く、それだけが重要です」(80) と結論づける。

自分が捉えた世界に誠実であれというメッセージは、『自分だけの部屋』の２年前に出版された小説 *To The Lighthouse* (1927) においても、リリーという登場人物の意識の中に表現されている。リリーは、流行に流されることなく自分のヴィジョンにこだわり続け、それを絵に表そうと創作に没頭している。彼女は、自分に誠実であろうと苦闘する。

彼女にはそう見えるのだから、あの鮮やかな紫や際立つ白をおさえてしまったら、それは誠実だとは思えなかっただろう。ボーンフォルト氏がこの地を訪れて以来、すべてを淡く上品な半透明の色合いで描くのが流行だとしても……「でも、わたしにはこう見える、私にはこう見える」と言って、彼女は、無数の力が全力で彼女からもぎ取ろうとする自らのヴィジョンの無残な残滓を胸にぎゅっと抱きしめる。(19)

このように主流の男性画家を真似るのではなく、自分の捉えた世界を表現しようと闘い続けるリリーの絵は、「わたしは自分のヴィジョンを掴んだ」(170) という言葉とともに、『灯台へ』の最後の場面で完成する。この結末には、ウルフが『自分だけの部屋』で展開した議論が、ひとりの女性画家が誕生するまでの軌跡として描きこまれている。

4. 「外から見た女子学寮」――夜の世界

ここで、『自分だけの部屋』の３年前に発表された短編「外から見た女子学寮」に目を転じ、ウルフが女子学寮をどのように捉えていたのかをさらに探っていこう。このわずか数ページの短い短編では、女子学寮ニューナムの夜の世界が描かれている。

> その庭では、歩き回る空間が必要ならば、彼女は木々の間をさまよえただろう。女性以外の顔に出会うことはなさそうなので、彼女はヴェールを剥いで、ぼんやりとした表情のない顔をあらわにし、部屋を覗き込むことができただろう。こんな時刻なので、部屋では、ぼんやりと無表情に白い瞼をおろし、指輪のない手をシーツに伸ばして、数え切れないほどの女性たちが眠っていた。だが、あちらこちらでまだ灯りがともっていた。(140)

この冒頭の場面では、女性たちが、男性に気兼ねすることなく自由に夜を過ごしていることが暗示されている。彼女たちは、夜中に庭を散歩することも、眠ることも、起きて活動することもできる。続く場面では、女子学生が勉強したり、お喋りをしたり、トランプをしたりする姿が描かれている。ここで注意すべきは、昼ではなく夜の女子学寮の場面が切り取られていることである。講義やスポーツ、クラブ活動などが活発に行われる昼ではなく、夜の世界が選ばれているのはなぜだろうか。

それには、男性がつくりあげてきた伝統的な教育システムに対しウルフが批判的であったことが深く関わっていると考えられる。前節で確認したように、ウルフは、男性が受けてきた教育は失敗で、それは彼らに飽くなき所有欲を植えつけ、その結果、第一次世界大戦のような大惨事が引き起こされたと考えていた。そのような認識を持つウルフが、たとえば同時代の女子大生小説 *The Scholarship Girl at Cambridge* (1926) のように、「団体精神」を育むための規則や規律を肯定的に描くとは考えにくい[1]。それは、次の一節を読めば明らかだろう。

> まさにその瞬間、やわらかな笑い声がドアの向こうから聞こえてきた。取り澄ました声の時計が時を告げた――1、2と。今この時計が命令を発していたのだとしても、気にも留められていなかった。火事、謀反、試験は、すべて雪のような笑い声によって蔽われ、そっと根こそぎにされた。その笑い声は、深淵から沸き上がり、時刻、規則、規律をふわりと運び去った。(“A Woman’s College from Outside” 140)

この場面では、男性が重視してきた「団体精神」を養うための規則や規律が、女子学生たちの「やわらかな笑い声」によって無効にされている。夜の世界では、それが可能になる。

「目覚めるとすぐに、職務という象牙の杖を掴むであろう」(141) 教師たちが眠る夜は、「放し飼いの牧場、果てしない野原、まだ形をなさない豊かさそのもの」(140) に喩えられる。女子学生たちのやわらかな笑い声が支配する夜の世界に、ウルフがまだ分節化されていない何か豊かな可能性を暗示させているのは明らかだろう。「この湧き上がる笑い声、この無責任な笑い声。この心と体からの笑いは、規則、時間、規律を流し去り、たなびく霞で薔薇の茂みを途方もなく豊饒にし、しかし形なく混沌と、漂い、さまよい、飾る」(141) という詩的な表現には、男性のつくりあげてきた教育システムを軽やかにすり抜けていく、オルタナティヴな女性だけのコミュニティが生みだすものへの期待が込められている。

その期待を体現するかのような人物がアンジェラである。彼女はこの短編の中で唯一素性を描きこまれている登場人物で、「アンジェラ・ウィリアムズだけが、ニューナム女子学寮で生計を立てるために勉強していて、熱烈な崇敬の瞬間でさえも、スウォンジーの父親の小切手や、流し場で洗い物をしている母親を忘れることができなかった」(139) と、ウェールズの工業中心地スウォンジーの貧しい家庭の娘であることが読者に知らされる。そのような厳しい経済的状況にもかかわらず、彼女はこのうえなく満ち足りて幸せな様子である。初めて登場する場面では、アンジェラ自身も鏡に映った姿もともに明るく輝いており、「まるで自分がアンジェラであることを喜んでいるかのよう」(139) である。彼女は、部屋を走り回って片付けたり、経済学の本を読んだり、学友たちとのお喋りを楽しんだりする。そして、ベッドに入りながら、「暗く渦巻く無数の年月の後、このトンネルの出口には灯りがある、人生がある、世界がある」(141) と悟る。

喚起力に富む比喩が散りばめられたこの短編では、貧しい家庭の娘アンジェラが、夢のように自由で美しい幻想的な夜の女子学寮ニューナムで、自分を偽ることなく、自分であることに満足して、満ち足りた生活を送る姿が描かれている。その姿には、ウルフの新たな女子高等教育への希望が映し出されている。

5. 歴史を書き直す――ウルフの夢

それでは、短編「外から見た女子学寮」で表現されているウルフの女子高等教育への希望とは具体的にどのようなものなのだろうか。ひとことで言うなら、それは、「歴史を書き直す」(ROO 35) 作業を積み重ねていく未来である。『自分だけの部屋』の第3章で「わたし」は、「フィクションは、蜘蛛の巣のように、とても軽くではあるかもしれませんが、それでも人生に四隅を繋ぎとめられています」と、文学と歴史の連関性を指摘し、「どんな条件のもとで女性は生きていたのだろう」(32) と自問しながら、歴史書に手を伸ばす。しかし、歴史書には17世紀までの女性についての記述はほとんどない。「わたし」は、文学作品で描かれる女性と現実の女性を次のように対比する。

> 想像上の女性は、きわめて重要人物です。しかし、現実では女性は完全にとるに足らない存在です。詩には最初から最後まで登場するのに、歴史にはほとんど姿を見せません。フィクションでは王や征服者の人生を支配するのに、現実では、どんな少年であれ、その親にむりやり指輪をはめられ、彼の奴隷にされていました。文学ではきわめて示唆に富む言葉や深遠な思想が女性の口からこぼれ出るのに、現実では女性は読み書きもほとんどできず、夫の所有物でした。(34)

「わたし」は、実在の女性に関する「事実の乏しさ」を嘆き、「欲しいのはたくさんの情報だとわたしは思いました。ニューナムかガートンの聡明な学生さんに、提供していただけないでしょうか？」(34) と訴えかける。そして、一般の女性の歴史を組み込むことで歴史を書き直す必要性を説く。

その訴えには、もし女性の「いまだ記録されざる生涯の集積」(67) が集められ、歴史が修正されれば、歴史に「四隅を繋ぎとめられて」(32) いる文学の女性表象もきっと変わるはず、という思いがある。「文学上のきらびやかな女性像はあまりに単純で、あまりに代わり映えしないのです」(63) という言葉から分かるように、「わたし」は、これまで文学に描かれてきた女性は極端で偏りすぎていると感じている。とりわけ「わたし」は、これまで女性がほとんど男性との関係においてのみ描かれてきたことを問題視する。

> 考えてみれば奇妙なことですが、ジェイン・オースティンの時代まで、文学上の偉大な女性たちはみな男性によってのみ眺められ、しかも男性との関係によってのみ眺められてきました。それは、女性の人生全体からすれば、なんと小さな一部でしょう。そして、その一部にしても、異性という黒眼鏡ないし色眼鏡をかけて見ていたのでは、男性は、その中のなんとわずかな部分しか知りえないことでしょう。(62)

これまで女性が男性との関係においてのみ描かれたことで、文学作品における「女性同士の関係が……あまりに単純すぎる」(62) と考える「わたし」は、歴史を書き直すことでそのような欠陥も是正されると信じている。歴史が男女の偏りなく書き直されれば、文学における女性表象も多面的になるはずだからだ。

この議論を踏まえ、最後の第6章において、ウルフは「わたし」という仮面を取って「自分自身に戻り」(79)、結論を提示する。ウルフが女子学寮ガートンとニューナムでさまざまな学問を学ぶ女子学生たちに訴えているのは、学問の成果を本にして出版してほしいということである。「教育を受けていないイギリス女性の多くと同じように、わたしは本を読むのが、たくさん読むのが好きです」と打ち明け、ウルフは、「ですから、些細なテーマでも、大きすぎるテーマでも、どんなテーマでも躊躇わずに、あらゆる本を書いてくださいと、みなさんにお願いしたいのです」(82) と述べる。そして、再び経済的自立の重要性を

強調する。

> 何とかしてみなさんにはお金を手に入れてほしいと願っています。そのお金で旅行をしたり、余暇を過ごしたり、世界の未来ないし過去に思いを馳せたり、本を読んで夢想したり、街角をぶらついたり、思索の糸を流れに深く下ろしてほしいのです……わたしのために、そしてわたしのようなたくさんのひとのためにそうしていただけるのなら、旅行と冒険、調査と研究、歴史と伝記、批評と哲学と科学の本を書いていただきたいのです。(82)

ウルフが繰り返し経済的自立の必要性を説くのは、それが「物事をそれ自体として自由に考えられる」(30) ことに繋がり、多様な経験を重ねることを可能にするからだ。そのような状況で女性たちが学問に打ち込み、その成果を発表していけば、おのずと歴史は書き直されていくことになる。ウルフは、そのような未来への期待を、女子学寮の女子学生たちに託したのである。

6. 結論

これまで読み解いてきたように、『自分だけの部屋』と「外から見た女子学寮」には、ウルフが女子高等教育に向けた希望のまなざしが読み取れる。ウルフは、男性のつくりあげてきた教育システムに対して批判的で、それは所有欲を刺激し、「団体精神」を奨励することで戦争を引き起こしたと認識していた。それゆえに、彼女は、女子高等教育には男性の教育システムをただ踏襲するのではなく、それとは異なるものを目指してほしいと願っていたのだと考えられる。「他の何よりも、自分自身でいることのほうが、はるかに大切です」(ROO 84) という言葉には、抑圧されてきた女性の歴史を踏まえたウルフの、女子高等教育に対する強い願いが込められている。「自分自身でいる」(ROO 84) ためには、「物事をそれ自体として自由に考えられる」(ROO 30) ようになるためには、経済的な自立が不可欠であり、だからこそウルフは「お金と自分だけの部屋を持たなければなりません」と主張したのである。

ウルフは、『自分だけの部屋』の終わりの部分で、自分が思い描く未来への希望を次のような言葉で表している。

> なぜなら、わたしはこのように考えているからです。あと1世紀ほど生きて……わたしたちひとりひとりが年収500ポンドと自分だけの部屋を持ったなら、考えていることをそのまま書き表す自由と勇気が常にあったなら、みんなが使う居間から少し抜け出して、人間をつねに互いとの関係においてではなく現実との関係において眺めた

なら、空も木々も、何であれ、それ自体を眺めたなら、ミルトンの亡霊の向こう側を……見やったなら、凭れかかる腕などなくひとりで進んでいくのだという事実、わたしたちは男女の世界だけでなく現実の世界とも関わりを持っているという事実……に向き合ったなら、そうすれば、機会が訪れ、シェイクスピアの妹であった亡き詩人は、これまで何度も捨ててきた肉体をまとうでしょう。(86)

この一節には、ウルフが女子高等教育に託した想いが集約されている。女性が経済的・精神的自立を成し遂げ、現実を見据え、自分の考えを誠実に表現できるようになること、それは現在の女子高等教育がいまなお目指しているものではないだろうか。

注

1 女子大生小説における「団体精神」については、『実践英文学』第71号（2019年3月刊行予定）掲載の志渡岡理恵「"People ought to live their *own* lives" —*The Scholarship Girl at Cambridge* (1926) における自己成型とキャリア」で詳しく論じている。

参考文献

Auchmuty, Rosemary. "The Woman Law Student and the Girl's College Novel." *Canadian Journal of Women and the Law*. 19.1(2007): 33-71.

Bank, Andrew. "The Making of a Woman Anthropologist: Monica Hunter at Girton College, Cambridge, 1927-1930." *African Studies*. 68.1 (2009): 29-56.

Batson, Judy G. *Her Oxford.* Vanderbilt University Press, 2008.

Black, Naomi. *Virginia Woolf as Feminist*. Cornell University, 2004.

Dyhouse, Carol. *No Distinction of Sex?: Women in British Universities 1870-1939*. UCL Press, 1995.

Elder, Josephine. *The Scholarship Girl at Cambridge*. 1926. Girls Gone By Publishers, 2012.

Fernald, Anne. *Virginia Woolf: Feminism and the Reader*. Palgrave Macmillan, 2006.

Gan, Wendy. "Solitude and Community: Virginia Woolf, Spatial Privacy and *A Room of One's Own.*" *Literature and History*. 18.1 (2009): 68-80.

Goldman, Jane. *The Feminist Aesthetic of Virginia Woolf: Modernism, Post-Impressionism and the Politics of the Visual*. Cambridge University Press, 1998.

Goodman, Joyce and Sylvia Harrop, eds. *Women, Educational Policy-Making and Administration in England: Authoritative Women since 1880*. Routledge, 2000.

Hamlett, Jane. "'Nicely Feminine, Yet Learned': Student Rooms at Royal Holloway and the Oxford and Cambridge Colleges in Late Nineteenth-Century Britain." *Women's History Review*. 15.1 (2006): 137-161.

Holland, Kathryn. "Late Victorian and Modern Feminist Intertexts: The Strachey Women in *A Room of One's Own* and *Three Guineas*." *Tulsa Studies in Women's Literature*. 32.1 (2013): 75-98.

Holloway, Gerry. *Women and Work in Britain since 1840*. Routledge, 2005.

Lemaster, Tracy. "'Girl with a pen': Girls' Studies and Third-Wave Feminism in *A Room of One's Own* and 'Professions for Women'." *Feminist Formations*. 24.2 (2012): 77-99.

Martin, Jane and Joyce Goodman. *Women and Education, 1800-1980*. Palgrave Macmillan, 2004.
Moran, Patricia. "Cock-a-doodle-dum: Sexology and A Room of One's Own." Women's Studies. 30 (2001): 477-498.
Newby, Jennifer. *Women's Lives: Researching Women's Social History 1800-1939*. Pen & Sword, 2011.
Park, Sowon. S. "Suffrage and Virginia Woolf: 'The Mass behind the Single Voice'." *The Review of English Studies*. 56.223 (2005): 119-134.
Phillips, Ann, ed. *A Newnham Anthology*. Cambridge University Press, 1979.
Poole, Andrea. "The Citizens of Morley College." *Journal of British Studies*. 50.4 (2011): 840-862.
Purvis, June. *Women's History: Britain, 1850-1945: An Introduction.* Routledge, 1995.
Robinson, Jane. *Bluestockings: The Remarkable Story of the First Women to Fight for an Education*. Viking, 2009.
Saloman. "'Unsolved Problems': Essayism, Counterfactuals, and the Futures of *A Room of One's Own." Tulsa Studies in Women's Literature*. 32.1 (2013): 53-73.
Sellers, Susan, ed. *The Cambridge Companion to Virginia Woolf*. Second edition. Cambridge University Press, 2010.
Solomon, Julie Robin. "Staking ground: the politics of space in Virginia Woolf's *A Room of One's Own* and *Three Guineas*." *Women's Studies*. 16 (1989): 331-347.
Sutherland, Gillian. *In Search of the New Woman: Middle-Class Women and Work in Britain 1870-1914*. Cambridge University Press, 2015.
---. "Self-education, class and gender in Edwardian Britain: women in lower middle class families." *Oxford Review of Education*. 41.4 (2015): 518-533.
Sypher, Eileen. "Shifting Boundaries: "New" and traditional women in Virginia Woolf." *Women's Writing*. 3.3 (1996): 297-310
Thane, Pat. "Girton Graduates: earning and learning, 1920s-1980s." *Women's History Review*. 13.3 (2004): 347-361.
Vickery, Margaret Birney. *Buildings for Bluestockings: The Architecture and Social History of Women's Colleges in Late Victorian England*. Associated University Presses, 1999.
Wiggins, Sarah. "Gendered Spaces and Political Identity: debating societies in English women's colleges, 1890-1914." *Women's History Review*. 18.5 (2009): 737-752.
Woolf, Virginia. *A Room of One's Own and Three Guineas*. (ROO) Oxford University Press, 2015.
---. "A Woman's College from Outside" in *A Haunted House: The Complete Shorter Fiction*. Vintage, 2003, 139-142.
---. "Professions for Women," *Selected Essays*. Oxford University Press, 2008, 140-145.
---. *To the Lighthouse*. Oxford University Press, 2006.
Ziarek, Ewa. "Woolf's Feminist Aesthetics: On the Political and Artistic Practice in *A Room of One's Own*." *parallax*. 16.4 (2010): 70-82.
沖塩有希子「イギリスの19世紀後半から20世紀初頭における女性の高等教育の状況──オックスブリッジにおける女子カレッジの教育的役割と意義」『日英教育研究フォーラム』第9号, 2005, 19-36.
奥山礼子「創作、女性参政権運動、サフラジェット──『自分だけの部屋』に読み取れるウルフの素振り」『ヴァージニア・ウルフ研究』24. (2007) : 81-89.
香川せつ子「エミリー・デイヴィスの女子高等教育思想におけるフェミニズムの考察」『日本の教育学』第38巻, 1995, 210-229.
佐藤元状「ウルフ、フェミニズム、優生学──1920年代における『自分だけの部屋』の文化的布置──」『ヴァージニア・ウルフ研究』19. 2002, 34-52.
志渡岡理恵「アイルランドから来た新入生──The New Girl at St. Chad'sにおけるナショナリズム」『実践女子大学文学部紀要』第55号, 2013, 16-24.

（しどおか・りえ／実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所 第2部門兼務研究員）

"A Woman's College from Outside"
— Virginia Woolf and Women's Higher Education —

SHIDOOKA Rie

Virginia Woolf's attitude towards women's higher education as seen in her *A Room of One's Own* (1929) and her short story "A Woman's College from Outside" (1926) is examined in this article. Although her father, Leslie Stephen, was a former fellow of Cambridge University and her brothers were educated there, she did not undergo any formal schooling. The university was a place she sometimes visited as an outsider.

In A *Room of One's Own*, which is based on two lectures she delivered at Newnham College and Girton College, two women's colleges at the University of Cambridge, Woolf criticized the traditional educational system created by men because she believed that it bred a craze for acquisition in them and caused wars. She looked upon the esprit de corps, which men so highly valued, with distrust. Therefore, in "A Woman's College from Outside", she describes Newnham College at night-time when women students flouted rules and discipline, not during the day when masculine values pervaded the college.

Woolf wished the students of Newnham and Girton would 'rewrite history' because she found it skewed and unreal due to the scarcity of information about women. She asked them to have the courage to write what they want and publish all kinds of books. She insisted that financial independence was essential for this because women could not 'think of things in themselves' if they were dependent on men and felt constrained in their presence.